入　選

「捨てられなかったスニーカー」
餅つきうさぎ

山形県の庄内にある身体障がい者の施設で暮らしています。日々、空いた時間を使って作品作りに取り組んでいます。私の作品は、自分が体験したことを物語にしています。今回の作品は３年前に、私の大好きなお母さんが亡くなってしまった時の悲しみを物語にこめました。　／餅つきうさぎ

うさぎさんの大切な記憶が丁寧に綴られていて、読む者を引き込む。お母さんご自身と、お母さんを想う娘さんの気持ちがまっすぐに伝わってくる、いい文章だと思います。今度は挿絵も、うさぎさんご自身が描いてみてもいいかもしれないですね。　／瀬尾 夏美

「竹林」
阿部 勝康

毎年古くからの知り合いから竹の子をいただいております。母親の実家の裏にも小さな竹林がありました。小学生の頃に見た記憶をたよりにクレヨンの線を指でなぞり、こすりながら描いてみました。　／みらいず

子どもの頃に見た風景を、まさに手探りであらわす。その手跡自体が線をつなぎ、色をつくり、絵を構成している。ふたつ寄り添うように生えたタケノコはまるまると太っておいしそう。黒いクレヨン一色で描かれていることでかえって、見る者たちは、青々とした竹の色味を自由に想像できる。大切な記憶たち、また、絵にしてみてほしいです。　／瀬尾 夏美

「タイトルなし」
石川 秋子

自分の色を選びながら個性豊かに自分の想いで文字をかきそれがしりとりでつながっている作品です。本人ももともと絵を描いたり、創作することが大好きです。　／なかやまにじの丘

一般的なしりとりの定義を緩やかに崩した独自の方法論に、その発想の柔らかさを感じました。言葉の終わりと始まりの同一性とその繋ぎ方は、その都度の都合により自由に解釈され、言葉同士が楽しく合わさり思わず声に出して読みたくなってしまいます。まなざし創の解釈の多様性を強認させる作品です。　／halkenLLP

「バッグと箱」
丸藤 菊夫

山形県酒田市出身。手先の器用さや、仕事の早さは若い人に負けないぐらい早いです。丸藤さんの年齢を知ると、聞いた人は驚きます。自分で描いた絵柄を使ってバッグや箱などを作り始め、最近では作業所の仲間の描いたものを使って作品を作ったりしています。　／しじゅうから at work

規則的なマークがびっしりと書かれている紙を、さらに折って結束にし、それを編み込んでカバンなどに仕上げているようです。制作のプロセスごとに、何度も繰り返される作業に没頭している姿が目に浮かび、まなざす側もその作業量に圧倒されるのでしょう。とても身近な素材と手法を用いながらも、卓越した技術と世界感をもったたたずまいに独特の魅力を感じます。　／halkenLLP

「トイ・ワールド・タウン」斉藤 諒

いつもマジックか鉛筆で消しゴムは一切使わず、大好きなキャラクターを描くのが好きな自閉症の息子です。毎日のように描いているのがウルトラマンの怪獣たち、かわいいアニメキャラも好きでノートいっぱいに描いています。今回はキャラ無しでの古代～未来へのワールドタウンを描きました。左下の山並みから描き始めて上へ、右へと世界を広げて描く様は横で見ていて私が時間を忘れてしまうほど…立体的に描いた街並みや城、トンネルや森を境にどんどん変わる風景のトイ・ワールドです。細かいところまでよく見て楽しんでもらいたい作品です。　／保護者

鉛筆で描かれた線を目で追っていくとその世界に迷いこむような不思議な魅力を感じます。コメントによれば、いつも大好きなキャラクターをノートいっぱいに描いているそうですが、そのキャラクターの視線で街を歩き回るような感じが鉛筆の線に現れているようにも思えました。同時に街を高い所から見下ろしたような視点は、世界を客観的に捉える別の眼差しもうかがえます。「古代から未来へのワールドタウン」が１枚によって表現されていますが、斉藤さんが描く街の未来がこれからどんな風に変貌していくのか、もっと見てみたい気持ちになりました。　／岡部 信幸

「イルカとシャチ」
川村 佳祐

今回は、「イルカ」と「シャチ」を描きました。「イルカ」は、やさしく描きました。「イルカ」で一番好きなところは、主役と青い海です。「イルカ」は、ニコニコしています。「シャチ」は、強く見えるように大きく描いてみました。一番好きなところは、顔と黒いしっぽのところと「シャチ」の体の青く見えるところです。　／川村 佳祐

イルカが青い海の中を楽しそうな表情で泳いでいる様子が伝わってきます。一方シャチは大きな紙に背景を細に塗り、黒と青を使い迫力いっぱいに描かれています。イルカの口元の泡やヒレの部分にある赤や黒や青の小さい丸で緻密に描かれた文様や、シャチのヒレの複雑模様の網目とサインペンやマジックで打たれた点の間隔には、形やまわりの色との対比やバランスなど、構成を考えながらいろいろな素材を使って表現する工夫が感じられ、独自の世界が出来あがっています。　／岡部 信幸

「銀河鉄道」
平 祐哉

きれいな星空を銀河鉄道に乗って世界中を旅行したいと思い描きました。今はどこにも行けないので世界が落ち着いたらと自分の一番の夢を描きました。成長と共に描く内容にも少しずつ変化が出てきたようです。　／保護者

まっすぐに引かれた線、きっちりと塗られた色。青と黄色、黒と灰色のコントラスト、どれもとってもうつくしい。何より、ひとつひとつ丁寧にあらわされた黄色い星々と大きな月が輝いていて、まだ見ぬ地へと旅することのワクワク感が伝わってくる。見たい景色を追求し、表現する力が毎年高まっていると感じます。これからも、いっぱい描いてほしいです。　／瀬尾 夏美

「かわいいもの」
齋藤 知美

歌詞を文字にしたり、大好きなことはメモ帳にたくさん書いています。メモ帳を見ながら書いていることを、人に伝えるのが好き。歌も一緒に歌いたいとスタッフと歌ったりします。作品は、長年取り組んでおり、大好きな人や大好きなキャラターやものを描いています。創造性豊かな表現に周りをいつも魅了します。描いた作品は、たくさんの人に見てもらいたいと思って描かれています。　／デイサポート天花

黒一色の絵や、線で描いた部分に色を塗ったり、線で描いた絵に上から分割するように色をつけた作品など、さまざまなバリエーションが見られます。いずれも丁寧に描かれており、誰かに伝えたい、見てもらいたいという齋藤さんの気持ちが伝わってきます。同じ紙の大きさの中で展開していく多彩な内容には、長年にわたる周りの人々とのやり取りと信頼関係が育んだものが現れているように思います。　／岡部 信幸

「ぼくのお母さん」
柿崎 忍

あらゆることに目もくれず、無心になってボールペンをいっぱい走らせました。2020年から突然描き始めましたが、自分でも気が付くと書いてしまいます。ここには、お母さんの顔もあります。好きな支援員の顔もあります。これからもいっぱい描きたいな。　／なごみ

一色のペンで描き埋め尽くされた紙面。その空白に顔が描かれています。青、緑、赤、黒、それぞれの色で別々の紙に描かれた作品が重ねて貼ってありました。描き埋め尽くされた面に突然の余白と顔、そのコントラストに「きざし」を感じ、提出されたテキストを読みました。本人の視点で書かれた文章には、2020年から突然描き始めたこと、母やケアスタッフの顔だということが書いてありました。　／吉田 勝信

「タイトルなし」
秋葉 勇人

自分の落ちつける環境・好きなタイミングで本人の信頼している職員と一緒に自分が好きな働く車を描きました。自分の個性を生かした、素晴らしい作品に仕上がりました。　／デイサポートにじの丘

厚みのある木の上にも横にも、車や数字や文字が描かれた働く車は、紙に描かれたものより物体としての存在感が感じられます。これからも気に入った車をたくさん作り、それらを横に連ねたり、上に積み上げると、さまざまな働きが協力し合う立体的な世界が生まれると思います。どんどん作ってください。　／岡部 信幸

「お父さんお仕事有難う」
長濱 哲哉

単身赴任のお父さんにご飯を一緒に届けた時にその場で描いたものたちです。メニューを書いたり、その時に自分の好きな車を描いてみたり…冷蔵庫に貼ってあるのを見ると哲哉と会話してるみたいだな～と思います。　／保護者

作品を見たときに最初に感じたのは、プレゼンテーションが上手だなということでした。作者が描いた、絵と文章のメモ書きとともに冷蔵庫にメモ書きが貼られていた写真がセットで並んでいました。最初は冷蔵庫に貼って使っているコミュニケーション・ツールとしてのメモ書きだったのかなと思いましたが、テキストを読むと赴任先の父へご飯を届けた際に描いたメモ書きだそうです。それを父が捨てるのが忍びなく、冷蔵庫に貼っている様子の写真だということがわかりました。作家本人がこのメモ書きを書くことで自身の考えが伝わることがわかったことでパニックが少なくなったということでした。自身の障害や家族の関係性の中で立ち上がった、生きる術としてのメモ書き。その視点や関係性を「まなざし」として評価した作品です。　／吉田 勝信

「紙袋」
須藤 由佳

須藤さんがさくらんぼ共生園に通所するようになり１年。絵を描くことに興味を持たれ、その後絵を活用した紙袋づくりにお誘いしたところ、継続的に創作に取り組まれるようになりました。創った紙袋は、日によって描かれる絵の雰囲気がガラリと異っていたり、パーツの組み合わせ方にもムラがあったりするのですが、言葉少ない須藤さんのその日の気持ちを現してるのかな、と思います。　／さくらんぼ共生園

作者の方は通所を始めて四年間が経ったのだそうです。最初は絵を描くことに興味があり、次にケアスタッフの勧めで、絵を素材に袋を作ることへ創作活動が移っていったそうです。本公募展へは、その袋が提出されました。おそらく、まだまだ作者の表現は変化を続けていくのではないかと思います。他者が大勢いる福祉施設へ通いはじめ、自己表現から始まり、現在は他者の道具になる物を作っている。誰かの道具を作るということは、素材となる物という他者や袋を使う人々といった他者が存在し、道具を媒介に自分の外側の世界につながる術になります。この徐々に個人が開かれていく流れに可能性を感じ票を入れました。　／岡部 信幸

「CDリスト」
今野 倭大

事業所の自分の机にて、正面には新しい紙、その向こうにペン類、右側には今まで描き始めたCDリストの紙の山。それを1枚ずつゆっくりと左側へ移していく。移していく中で、気になる曲名を見つけると、新しい紙に描きこんでいく。その繰り返しで、彼の好きな曲は混ぜ合わされて増えていきます。 ／保護者

色鉛筆で書かれた何かのリスト。複数の紙がドン、ドンと積まれていました。一見、なんのリストかはわかりませんがよく読むと音楽のリストかなと思わせる言葉があります。何枚かめくると同じ曲名がちらほら見えます。提出されたテキストは、蔵御さんの回顧で書かれていました。白紙を自分の前におき、これまでに書いた膨大なミュージック・リストを右から左に移し、何か気になった曲名があるとそれを目の前にある「今日のミュージック・リスト」に書き加えていく。その日の気分で好きな曲を組みあわせたアルバムを作っているような作品でした。彼が子が毎日行なう日課をよく理解している親の「まなざし」があり、その関係性を評価した作品です。 ／吉田 勝信

「タイトルなし」
富樫 マリア

この方の夢は、イラストレーターになり、お金を稼ぐことです！ご自分の世界観の中で個性的な絵をかくことが得意です。今回の作品は様々な色を使い、個性的な作品になっていると感じました。 ／デイサポートさくら

コメントには作者がイラストレーターになりお金を稼ぎたいという意欲があることが書いてありました。作品を見ると造形が不思議な樹のようなものを描いた作品とデフォルメされた夏野菜やかぼちゃが描いた作品があります。デフォルメの仕方が面白くて、詳しく伺うと、樹は想像で描き、野菜は見ながら描いたと言います。イラストレーションを生業とし、稼ぐというときに「デザイナーが使う」という選択肢に考えるならば、実物を見ながら描く方の作品が、面白さ：伝達性＝4：6といった具合で扱いやすく良いと思います。 ／吉田 勝信

「めろんあじです。色んなあじです。」
山口 小夜子

最近のブームは「ちゅんちゅん」というフレーズ。スズメか?!仲間からは『ガハク』と呼ばれ、わたしの会社を代表するアーティストの1人です。毎日、楽しそうにニコニコしながら、時には真剣なまなざしで絵や、手織りに取りくまれている小夜子さん。色んなあじのキャンディかな？どんなあじかな？食べてみたいな～！ ／わたしの会社

めろんあじ、いろんなあじ、いったいこれはなんだろう。想像していると、だんだん楽しくなる。いつか、真ん中にデン！と描かれたこのまあるい物体を、誰かと一緒にながめながら、あれこれ語り合ってみたくなりました。 ／瀬尾 夏美

「窓から見た景色」
園分 淳子

山移動中の車内から見える看板や文字をいつも楽しみながら眺めており、思い出しながらスケッチブックに描きためています。完成すると作品の文字を声に出して周りの人に教えてくれます。 ／まある

文字と文字の微妙な重なり、色と色の繊細な距離から、作家が見てきた景色がレイヤーとなって重なっているように感じます。景色を心に止めることは、目に見えた風景そのものを見つめるだけではないことを気づかせてくれます。まなざす側の気づきを呼び起こしてくれる作品と言えるでしょう。 ／halkenLLP

「僕の夢」横川 聖歩

自分に車の免許があったら乗ってみたいと思うトラックをかきました。かっこよくてキラキラ光っている所が大好きです。いつか免許をとって乗りたいです。 ／横川 聖歩

外観のイメージから、まだ見ぬ内装が繰り広げられるのではないかという期待感を感じ、デコトラのまだ描かれていない内装が気になりました。いつの間にかやり過ぎてしまうデコレーションのように、夢も際限なく広がることが感じられ、それに寄り添っていこうとするまなざしも大変良いです。 ／halkenLLP

「シクラメン」
五十嵐 真也

シクラメンをかきました。冬の花だな～って思ってかきました。土の色をがんばってかきました。赤い花の色は元気だからあふれるくらいにかきました。 ／五十嵐 真也

画面の赤が真っすぐに飛び込んでくる。そして力強いクレヨンのタッチと、淡い色味の組み合わせが印象的。これは、シクラメンの花だという。たしかにこの絵は、冬の絵だとわたしも思う。五十嵐さんは、モチーフと、そのものが持つイメージを同時に現してしまう。これはすごいことだ。これからも、いろんな、好きなものをたくさん描いてほしい。 ／瀬尾 夏美

「カラーボール（パート7）」「いろどり（パート5）」「万華鏡（パート5）」瀬田 健治

緻密な線と色彩が極端強く描かれ、それを拾い上げたまなざしも見えてきます。一見すると機械的なタッチのように見えますが、そうではなく。どこか有機的な緩やかさを包容しているように感じます。心地の良い方華鏡を覗くようで、今にも動き出すのではないかと。作品の世界観に引き込まれました。 ／halkenLLP

「夢幻」鈴木 千賀子

いつもなら通りすがってしまう日常の風景。でも、少し足を止めると、そこにはたくさんの「非日常」の風景がある。現実なのか、夢幻なのか。そんな世界を表現したくて撮影しました。見た人によって、どう見えるのか？それが、いろいろな世界を見せてくれると思います。 ／鈴木 千賀子

モノトーンの樹皮の接写と遠くから眺められた枯木、そして樹皮を連想させる褐色の剝がれ落ちる物体。なんでもない日常の風景を、鈴木さんはカメラを通して見つめ、「非日常」の世界を表現しています。カメラはモノの表面を写し取る機械ですが、鈴木さんの作品は、確かにそこにあったはずの光景の背後にある気配のようなものをも感じさせます。今は誰でもスマホで簡単に写真を撮りすぐ画面で確認ができる時代ですが、写真（プリント）表現の奥深さを感じさせてくれます。 ／岡部 信幸

相談

［関連イベント］

おめでとう&相談day

昨年度に引き続き、悠創館（山形市）での展示期間中には関連イベントとして作家と審査員との交流・相談時間を設け、5日間で16名の作家の参加がありました。審査員は入賞者に個別に賞状を渡して作品について直接コメントする一方、それぞれ1日ずつ展示室に滞在。出展者から活動についての相談を自由に受け付けられるようにするなど、作家と審査員との交流が生まれる場づくりを行いました。

きざしと まなざし 審査員総括

瀬尾 夏美
アーティスト

「きざしと まなざし」という名前を持つこの公募展に携わって４年が経ちます。"つくる人"と"まなざす人"による協働作業の連なりがあってこそ、表現は社会に現れてくる。それは、関わる人たちの障害の有無に関わらず、とても本質的なことですが、意外と言葉にされていないようにも思います。"つくる人"がいくら素晴らしい作品をつくってもそれを見つける人がいなければ社会に広まっていかないし、"まなざす人"は表現が生まれる瞬間に立ち会うことで感動したり元気になったりする。両者は互いに支えながら暮らしていて、その先に、見る人たちがいます。

「きざしとまなざし」の会場では、見る人たちが刺激を受け、私も作りたい！と思ったり、あの人が作っているものも面白いから展示してもらおう！と気がついたり、新たな"つくる人"と"まなざす人"が生まれる場にもなっています。山形という土地で、そういった動きが連なり、着実に広がっていっていることを感じています。

新型コロナウイルス感染拡大の影響で、集まることが難しい日々が長く続いています。ですが、実際に展示会場にみなさんが集い、作品を介して予期せぬ出会いや再会があり、次のアイディアが生まれていくことの豊かさは、決して手放さずにいたいです。山形で育まれている"表現"に関わる本質的な実践と、"つくる人"や"まなざす人"たちをこれからも応援します。

halken LLP
クリエイティブデュオ
アイハラ ケンジ・三浦 晴子

大泉憲司さんの《昔のふるさと》が印象に残っています。小瓶や調理器具などが陳列されたお店のような空間が描かれた作品です。原色で染めたシンプルな小瓶や器は、木のような温もりを感じる机に丁寧に陳列され、上から下から横からと、縦横無尽のパースペクティブで構成されています。さらにこの作品を魅力的なものにしているのは、冷蔵庫やかき氷機から伸びたコードなど、一見すると見過ごされてしまうようなモチーフが存在感を帯びて配置されていることです。丁寧な観察とともに、固定概念に囚われない素直な価値観に、心が洗われるように感じました。また、大泉さんは宮城県からの応募で、この作品は生まれ故郷である山形に想いを馳せて描かれているようでした。そのことも相まってか、時間や空間を超えて故郷を心に留めている姿勢に引き込まれてしまいました。また、毎回のように応募されている方々の作品にも目が止まりました。その中でも山口小夜子さんの《めろんあじです。色んなあじです。》、鈴木智さんの《動物シリーズ》には大変な驚きがありました。毎回の応募の度に、表現の変化やバリエーションが感じられることもこの公募展の楽しみのひとつかもしれません。本展では応募作品が全て展示されますが、回を重ねるごとに見る人それぞれの価値観による「まなざし」も育まれていたのかもしれません。ここでも、表現の「きざし」とそれに寄り添う「まなざし」を再確認することができたようです。

（halkenLLP 三浦 晴子）

岡部 信幸
山形美術館副館長 兼 学芸課長

「やまがた障がい者芸術作品公募展」の審査を今年も担当しました。新型コロナウイルス感染症感染防止のため、審査員が別々に審査を行い、後日 ZOOM での合議によって最終選考が行われました。審査会場には絵画やイラストや書、デザインや写真、そしてオブジェなど、作者の「つくりたい」「表現したい」という思いに溢れたもの、日々の暮らしの中で反復される行為が顕著なものなど、多彩な作品が並んでいました。「きざしとまなざし」をテーマとする審査にあたっては、何をどう表現しているかについて、創作された作品と使われている画材や素材と技法の関係からじっくりと見つめ、さらに創作の傍で見守る家族や周りの人とのやりとりをポイントにしました。

最終選考で議論になった一つが、作品性についてでした。表現したいという衝動や意図が、見る人に共感をもたらす作品にまで至っているかという判断の難しい問題です。図工と美術の違いといえるかもしれません。公募展である点で、コンセプト―素材・技法―作品の関係が最適な作品であることが求められる一方で、「表現のきざしとそれを支えるまなざし」の観点から、例えば行為の反復にとどまるような作品であっても、そこに未知のアートの兆しを見出すこともできるように思います。

普段の生活の中で、家族や支援者と作者が「作ること」と「見ること」と「対話すること」を通じ、素材や形式をどんどん改変していくことで、表現行為のバリエーションの広がりと深みが進み、作られたものが未だ見たことのないものへ飛躍することにつながるのではないでしょうか。その意味で、作品の展示の際の来場者との交流や、五感を働かせる身体を使ったワークショップも有効な機会になると思います。新たな表現のきざしを媒介に、協働するさまざまな人々の感性とアートの可能性を開いていく「場」として、本展の試みがますますその意義を増していくのではないでしょうか。

吉田 勝信
グラフィックデザイナー

私は山に入り食料などを採集している。例えば、薬の素材になる植物の薬効が一番強いのは土用の季節に採集したときだ。それは梅雨の後に気温が上がり土中の水分が減り、同時に植物の体内の水分も少なくなり薬効となる成分が濃縮されるからだ。このように、質の高い薬を作ろうと思うと、おのずと地勢や生態系、そのメカニズムを身体的に理解することになる。世界への解像度の差が制作物の質を左右する。食糧や薬だけの話ではなく、どんな種類の物を作るときでも世界への解像度が重要になってくる。

場合によっては私の内側の世界のときもある。人はそれぞれの仕方で世界を認識しているだろうし、それぞれが理解している世界の構造もそれぞれ異なっているだろう。その構造へ自分自身がアクセスするとき、ぼろりと表現が立ち上がる。これが「きざし」としたとき、それを他者へ伝えるのはなかなか容易ではない。

「まなざし」というのは「きざし」＝「その人の世界の見方」に触れ、部分的だとしてもその人の世界を認識する術（すべ）や構造を理解している状態を指すのではないかと思う。

そして、「まなざし」は「きざし」をその通りに分かることが終着点ではなく、分からないから出発し、理解しようとすることでなにか別の理解ができる。この過程で「きざし」が増幅し世界が広がっていくことが面白いのだと思う。

人材

ネットワーク

［関連イベント・ワークショップ］きざしとまなざし

［関連イベント］

「ダンスのきざし／からだでかんじる」

子どもから大人までの希望者が参加できるダンスワークショップを、屋外にて開催しました。悠創の丘にて、寝転がったり、太鼓の音に合わせてはだしで歩いたり、太陽の暖かさや地面の感触を味わいながら、各自が伸び伸びと、からだを動かしました。

■ 開催概要

開催日 ： 2021年11月6日（土）（午前と午後の2回開催）
会　場 ： 悠創の丘（山形市）
ファシリテータ ： 加藤 由美さん（舞踊家/ 舞踊振付家）

芝生のある丘での青空レッスン。太鼓と鈴と紐と etc…アレの次にコレやって etc…と、準備万端。私にとっては初めてお会いする皆さんへのファシリテーション。少し不安もありましたが、いざスタートしてみるとすぐに不安解消。皆さんが自由自在に動いてくださる！ ダンスの兆しどころか、屋外の空気を感じまくってからだが勝手に動いている！ これって、いつも私達が踊っている場踊りの即興ダンスと同じではありませんか！ そっか～、みんなの動きを拾っていけばいいんだと気づき、時間が経つにつれてこの方法とダンス作品を創作してみたい～！と思いが募り、またひとつ夢を持てた貴重な時間となりました。後日、ダンス体験を絵に描いてくださった方がいるという、からだで感じたおまけ付きのアートな時間。ご参加くださった皆さま、ピカピカの体験をありがとうございました。いつかステージで！

加藤 由美さん（舞踊家/ 舞踊振付家）

参加者の声

あの後お日様の絵を描きました。
ほかほか気持ちよかったです。

参加者／奏さん
（アーティスト）

今回参加し、周囲を感じる知覚を「きざし」として捉えることができました。その過程では、まだ互いを知れていない間柄でも視線や言葉を交わし合えたり、動きを真似し合ったり、笑い合えたりしたことが印象的でした。また、障がいのある方（A さん）と取り組む際、「" 聴覚障がいの "A さん」ではなく「A さん」自身に向け、知りたい・伝えたいという気持ちが大事だと気付きました。表現について視野を広げられた貴重な時間でした。

学生サポーター／大泉 有理紗さん
（山形大学４年生）

自由に動くとなると、自分はいろいろ考えてしまいます。利用者さんのほうがあまり構えずに自由に動くことが出来ていてすごいなと思いました。

参加者／武田 幹さん
（グループホーム支援センター心音スタッフ）

太鼓の音に乗って
足をトントンと動かしました。
幸せだなぁと思いました。

参加者／鈴木 智さん
（グループホーム支援センター 心音）

［企画展］

「やまがたのきざしとまなざし 2021」

障がいのある作家の表現（＝「きざし」）と、それに寄り添う「まなざし」に焦点をあてた 4 回目となる企画展「やまがたのきざしとまなざし 2021」では、山形県内の３名の作家を中心に紹介しました。表現する人と、そこに寄り添う家族や友人との関係性に着目し、寄り添う人の目線による印象的なエピソードやポートレートなどを作品とともに展示。作家を取り巻く環境のなかの「まなざし」を展示で感じていただけるよう工夫し、何気ない日々のなかで表現のきざしを見つけるチカラ（＝まなざし）が拡がるようにとの思いを込めました。

自主性を育み、自立を促す、まなざし。

表現する人
佐藤 理恵子さん

寄り添う人
佐藤 貴恵子さん

農業を営む佐藤貴恵子さん理恵子さん親子。理恵子さんの自主性を尊重する、母・貴恵子さんのまなざしの奥には、理恵子さんへの信頼と、本人の自立を自然と促すような環境づくりがあるようです。

佐藤 貴恵子さんの まなざし

野菜の栽培では、種類によって畝（うね）とのあいだの幅が決まっていますが、ネギの場合は 90 センチ以上です。この幅であれば、鍬を振ったり草むしりしたりすべての作業をまるごと、一畝（うね）そのままで理恵子に任せることができます。本人も、出来るものをまるごと任されたほうがいいですよね。

理恵子が絵の題材を探しているとき「花の名前、なにがある？」と聞かれ、「バラ」とか「スイセン」と答えました。こちらが先に発言して何かを用意するよりも、理恵子に聞かれてから「それならこれだよ」と答えるようにしています。

理恵子が刺繍をするときは、まず布に絵を描いて、そこに糸を刺していきます。何を描くかだけでなく、どの色の糸を刺すかということも、すべて理恵子が自分一人で決めます。その決めていく過程のなかで、イメージが一つまたひとつと膨らむのではと思っています。私はただ出来上がったものを見て、「がんばったね」と声をかけるだけです。

洗濯物干しや掃除など、毎朝の仕事は確実に実行しないと気持ちがおさまらないようなんですね。小学校から酒田市の特別支援学級に通ったのですが、朝は 6 時半に起きて 7 時過ぎのバスに乗るという規則正しい生活リズムでした。子どもの頃からそういう時間感覚を身体で覚えていったのかもしれません。その中でも 3 年間の寮生活では、「理恵子は時間をちゃんと守るから大丈夫だ」と先生からもお墨付きでした。今も「次なにすっかなあ」ってしょっちゅう考えているのかもしれないです。

もうひとつの まなざし

お宅に飾ってある刺繍が目に入り気になっていたところ、それが理恵子さんの作品である事を知りました。ただただ線を重ねた単純な作品に個性を感じ、その時その時の気持ちを素直に表現していることに感銘をうけました。美術館ではない日常にある作品である事に、心ひかれると同時に、これを何かの形で発表できないかと思うようになりました。そこで、行政の方に携帯で撮った作品を見せたところ、「これはいい！」との反応でした。その方から、作品公募展の情報を教えてもらい、恐る恐るで家族にお話しをしてみると、二つ返事で「やってみる」と、素敵に受け入れてくれました。いつも笑顔で、ただただ自然体の理恵子さんとご家族の姿こそ、この作品のルーツだと思います。

（地域包括支援センターケアマネジャー／堀 千秋さん）
※理恵子さんの祖母の担当スタッフ

佐藤 理恵子 プロフィール

1977 年酒田市生まれ。山形県立鶴岡高等養護学校卒業後、水産会社に 8 年間勤務。会社の廃業を機に家業の農業を手伝うようになる。高校時代に覚えた刺繍を母が勧めたことを機に、午前は農業、午後は刺繍の生活を 15 年間続けている。祖母が利用している福祉サービス職員に作品を見せたことをきっかけに地元のアート展に出展。以来、さまざまに声がかかるようになり、県内外での出展の機会が増えている。